

皆さん、こんにちは。親鸞聖人がご製作くださいました「正信偈」をこうして皆さんとご一緒に勤めさせていただく。なんとという有難いご縁であるかということをご申上げます。

暑い夏が過ぎたかと思いますと、大雨が降って大変な被害が出ております。人命にかかわる事故がたくさんあります。人間の歴史を考えますと、私たちの祖先の方々が色々な災害に遭われて、悲鳴を發し、悲しみに暮れ、生きる意欲を失われてきたという、そういう並々ならぬ悲しみの歴史があるのであります。そういう人間生活の喜び、何でも無い幸せ、また悲しみ。そういったものを貫いて、浄土真宗の教えが相続されているということをご改めて思うのでございます。

今朝も地震がありまして、この関東に住んでおりますと、大正の関東大震災があったものですから、いつ大きなのが来ても不思議ではないと思うのであります。しかし、無事であるといつの間にか、無事に慣れてしまうということがありまして、それもまた人間の悲しい習性であると思うのでございます。そういう中で親鸞聖人の「正信偈」を学ばせていただくということは大変意義の深いことであると思えます。真宗門徒の一人ひとりとして意義が深いということだけではなくて、今この時代にこの日本の中に生きておる一人ひとりの人間として。もっと言えば地球世界の中に生きている一人ひとりの人間として、親鸞聖人が九十年のご生涯をかけて、明らかにしてくださった教えを聞けるということはまことに大事なことであるということをご思うのでございます。

今日は「正信偈」に学ぶということで、三回目ではありますが、初めに大変恐縮ですけれども、八月を過ぎて九月ということでありまして、敗戦後七十年ということ、終戦七十年。終戦ということではございますが、私自身は終戦という言葉ではどうも問題が残ると。何故ならば、未だに戦争の傷跡を抱えて、呻いていらっしゃる方々がたくさんおられます。日本だけじゃありません。そういうことを考えますと、私は敗戦七十年ということじゃないかなということをご思う者の一人であります。

八月十五日は盂蘭盆。私たち仏教徒にとりましては、大切な伝統の行事でありますけれども、ご承知のように仏弟子の目連尊者が神通第一という覚りを得て、先立っていったお母さんのことを心配すると、お母さんが餓鬼道に落ちて悩んでいることがわかりまして。目連一人の力ではどうしても救うことができないということでお釈迦様のところに行くと、お釈迦様は、「目連よ、あなたの母であるけれども、それはあなた一人の力ではとても救うことは出来ない。安居の終わる日に僧伽にお供養し、そしてあなた自身が懺悔をするということが大事であります」と言われてその通り行って、目連尊者のお母さんが助かるという。歡喜会とも言うのですね。

盆踊りということをご何気なくやっておりますけれども、私の聞いているところでは目連尊者はおふくろ一人を助けられなかったが、お釈迦様や僧伽のお力によって、目覚めていくことができた。その喜びで歡喜するという。歡喜ってということは身も心も喜ぶという。親鸞聖人は歡喜ということにつつまして。これは仏陀釈尊が説かれておる言葉ですが、信心歡喜という。それは私たち、本当に深いご縁をいただいて人間に生まれさせていただいておるのであります。人間に生まれて本当の喜びは何であろうか、本当の幸せは何であろうか。どうでしょうか。これはお一人おひとりが自分自身の胸に手を当てて、問い尋ねる以外にはないと思うのであります。そういうことを問い続けていかれた歩みがあるわけです。

私たちがこういう時代の中でこうして聞法させていただくということ。仏陀釈尊の教えに会い、その教えをいただかれた親鸞聖人の教えに遇って、人間に生まれたということがよくぞよくぞ人間に生まれさせていただいたということを実感すると。私の固有名詞は中津功であります。私自身も何で中津功がこの世に生まれて生きなくてはならないのかということをご悩み、考えさせられた時

期もあります。幸いにも仏教に遇い、親鸞聖人の教えに出遇うことができ、よくぞよくぞ人間に生まれさせていただいたというそういう感銘を持っておるものの一人であります。

目連尊者は仏陀釈尊の弟子として神通第一という大変優れた用きを身に得たのでありますが、目連の存在一人がお母さんにどれだけ世話をかけ、苦しませ、悲しませていたかわからない。餓鬼道に落としたのは実は目連であったという。自分自身であったと。そういう自覚が仏陀釈尊を通して教えられた。私たちは親たちに少しばかり孝行すると良い子どもではないかと思ってしまうかも知れませんが、私は仏教に出遇うとそうではないと気付かされるのです。親たちにどれだけ深いご心配、お世話、ご苦勞をかけたかわからないと。そのことにおいて私という一人の人間の営みが支えられておるということをお教えられるものであります。だからお盆の行事ということは、私は大変深い意味があるなあという風に思うのですね。自分という一人の人間がこの世に生まれてきておるということにおいて、先立っていかれた親たちに、深い罪障を負わせておるということがあるわけですね。

今日は太平洋戦争のことを申し上げるのでありますが、太平洋戦争中のものがない時、親たちは幼い子どもを育てるために、それこそ餓鬼道に落ちて、食べ物を漁ったということがあります。そういうことを決して忘れることは出来ない。敗戦の事実ということをお本当に受け止めて、平和ということをお本当に考え、願って生きる。一人ひとりがそういう歩みをするべきであると、そういうことが願われておるということをお思うのでございます。

ご住職様は全日本仏教会の理事長をなさっておられまして、全日本仏教会で不戦決議を出されたということをお聞きまして。何か今、日本の中で怪しい雲行きもありまして、今は大変大事な時期であると思えます。これはもう仏教の精神、仏陀釈尊の精神からいって不戦決議ということが自ずと出てくる。それもまた人間の一番深い願いであると、根本の願いであるということをお教えられるのであります。

今年もやはり八月六日、広島のお原爆が落とされた日に、松井一實市長が平和宣言をお出されました。その中で「核兵器は、非人道性の極みである」と。そして「絶対悪である」ということを宣言の中で言っておられました。本当の平和が希求されるということをお、広島で原爆を被爆されたその土地の中からそういう宣言が出てきたということは、大変大事なことであるという風に私は受け止めるものの一人であります。

広島に原爆が落ちたとき、私は小学校の四年生でした。七十年は草木も生えないだろうということをお言われて新聞にも書かれていたと思うのです。それ程の大きな被害なのであります。草木は生命力が本当にすごいですね。人間の命の中にも非常に深い生命力、深い願いがあります。脈々と息づいております。私は、それは宗教心であるという風に教えられるものの一人であります。欲望は深いですけれども、人間の欲望によって自分をも殺し、人をも殺すというそれ程深いものであります。その欲望を貫いてもっと深いところから人間を呼び覚ましてやまない、そういう精神、心が宗教心であると。阿弥陀の本願は当にそういう最も深いところからやむにやまれずして、湧き上がってきた、立ち上がってきた願いなのです。そういうことに親鸞聖人は命をかけて明らかにされたということがあるわけですね。

八月の九日は長崎で原爆が落とされました。長崎は一発の原発で、七万五千人の方々がお犠牲になった。広島は十万人以上ですね。田上富久市長の宣言の中で、特に大事なことをおっしゃってくださいなと思うのは、「平和の為に私が出来ることは何だろうと考えてみてください」という言葉でございます。それは長崎におられるの方々だけではなくして、私は、この言葉を聞きますと、全日本人、全地球人というそういう広がりを持った言葉だと思えるのですね。その宣言の言葉の中でも「世界の皆さん、戦争と核兵器のない世界を実現する為の最も大きな力は、私たち一人ひとりの中

にあります」。これは大変大事な言葉であると思います。「市民社会の力は政府を動かし、世界を動かす力なのです」と。これはよくぞ宣言文の中で表現してくださったと思います。広島、長崎の問題は決して他人事の問題ではない。生きておる一人ひとりの人間の問題であるということをはっきりと打ち出してこられた。

そして「日本政府に訴えます。国の安全保障は、核抑止力に頼らない方法を検討してください」。核抑止力ということの当然のこととして言われておるのですね。「核の傘から非核の傘への転換については是非検討してください」と。核というのは何ですか。一瞬にして何十万という人間を、どういふ人間であろうと殺すわけでしょ。傷跡を残すわけでしょ。それを日本は広島と長崎に落とされた。勿論そこには戦争を起こしたというそういう責任の問題はありますけれども、こういう最新の科学技術文明が、人類最悪の殺人兵器として実行され、勝てば善である。そういう核兵器がたくさん核保有国の中には用意されておると。核の傘の中での平和ということに、日本自身がそこに埋没してしまっているということは、太平洋戦争の何百万何千万という人間の犠牲の中から生まれてきた戦争放棄という、そういう人間が本当に担わなければならないことがどうなっていくのかということが、改めて問いかけられておると思われるのであります。

これは八月十五日の朝日新聞に掲載されていた、八十八歳の秋草鶴次さんという方の短い文章です。海軍兵として硫黄島へ派遣されていたと。艦砲射撃でどんどんやられて殺されていく。冷たい。重い。苦しい…という悲鳴の中でだんだん感覚がなくなっていくような状況の中で日本軍の司令部の壕に米軍が火をつけた。燃えながら助けてくれと叫ぶ日本兵を、味方が「黙れ」と撃ち殺した。味方同士ですよ。これは随分聞かされることですね、硫黄島でなくても。ガマの中に逃げ込んで、そこに軍隊を入れると。逃げ込んだ市民の赤ちゃんが泣くと、「鳴き声を止めろ」と。お母さんが子どもの息の根を止める。そういうことが何件もあるようです。

そういう中で私が聞いた一つが、ハワイの生活をして帰っておられた沖縄の方が、同じようにガマの中に逃げて、いよいよ切羽詰まったと。日本は、自決ということを教え込まれていたのです。田舎は四国の香川県。田舎の田舎です。田舎に“ど”がつくような田舎でしたけど。でも最後の一人まで、戦うと。捕虜になるなんてとんでもないというそういうようなことが教育で徹底的に叩き込まれていたわけです。その沖縄のガマの中で自決ということが叫ばれる時に、アメリカの生活をしてきた人は、いや、殺されないと。投降しようというので、そのガマの人は全員助かったということが放送されています。

だから本当に大事なことを知るか知らないかということは命に関わるのです。僕はそういうことを智慧と。如来様の智慧というものによって、人間が平等に尊い存在であるということを実際に教えられる。智慧はですね、あってもなくてもいい、そんな呑気な話じゃない。聞きたい人だけ聞けばいい、そういうものでもありません。聞かずにおれないものである。そこにやはり先達の方々が身命を落として、命をかけて尋ねていかれたという意味がございます。そういうことが私たちに相続されているのであります。

せがれが死んで親が喜ぶはずがないと気づいたと。親は喜んで出したのですよ。恐らく多くは表面上の喜びだと思ふのです。陰で泣いてね。お前、死なないで元気で帰れよと。そういう会話もね、なされていたに違いないという風に思います。人様の前ではそんなことは絶対に言えない。「死ぬために来たのではない。おれは、自決はしない」。その次の言葉ですね。「傷口のウジを食べるほど飢えた死の瀬戸際で、自尊心を見つけた」。この言葉を私は今日、皆様方と一緒に聞きたいという風に思いました。傷口にウジが湧くのです。そして飢えていると、食べるものがない。その傷口に湧いているウジを食べたというのですよ。私は食べられるものは何でも食べたということも聞いておりましたが、自分の傷から湧くウジまで食べたということを知ったのはこの度が初めてであり

ました。人肉を食べたとかね、色んなものを食べたということは聞いております。戦争ということはどれだけ悲惨であるかと、地獄であるかと。また餓鬼であるか、畜生であるか。

阿弥陀の本願の第一願が「無三悪趣の願」という。三悪趣というのは三悪道という。地獄、餓鬼、畜生。私の本当に開くお浄土の世界に、地獄、餓鬼、畜生があるようでは、私は阿弥陀仏とならないという誓いなのです。私はこのことは非常に大事な意味があると思うのです。やっぱり本願は人間の悲鳴から始まっているのではないのでしょうか。どんなに幸せそうに見える生活にあっても、縁があれば悲鳴を発するということがあります。水害がそうでしょう。地震、戦争、家庭の中の争いもそうです。ウジを食べてまで命を繋ぐ。人間というのはそれ程悲しい存在であるということですね。そのことを忘れてはならないということです。

それは私自身がそうであるという。着るものと食うものが身命を支える。これは蓮如上人の御文の中にある言葉で、食うことと着ること、この二つが欠けたならば、悲しきこと限りなし。まず着ることよりも食うことが一日でも二日でも欠けたらもう命終わるように心もとなく寂しくなるのであると。そういう人間の現実を踏まえて、現実立って、阿弥陀の本願の教えに会い、念仏申すということが本当に大事でありますということをおっしゃるのですね。だから念仏に生きる道というのは決して観念的なこの絵に描いたようなそういう教えではありません。食べるものがなければ傷口から湧いたウジ虫も食べずにおれないようなそういう人間の姿がなんとまあ悲しい事実であるかという悲しみを持って受け止められるところに人間が人間となるのではないのでしょうか。ただ猛獣であるならば、殺した悲しみはありませんよね。飢えの悲しみはありませんよね。

だから私は浄土の教えというのは人間の一存。現代の言葉で言えば現実存在。現実存在というものに徹底的に立っていると。現実存在ということは十方衆生がそうであると同様に、私たち一人ひとり間違いなく現実存在を生きておる一人であると。田上さんが「人類一人」と言った言葉はですね、大変私は大事な言葉であると思います。

親鸞聖人は本願を聞かれる中でね、もう兼ねて既に受け取っておられるのですよ。人類ということの本願という言葉で言えば、十方衆生と。十方衆生というのは法蔵菩薩が本願を起こして、十方衆生の皆漏れず救い遂げたいと。目覚めさせたいと。親鸞聖人はこの十方衆生という言葉について十方のよろずの衆生なりという。このよろずの衆生と言う時に、これは人間中心主義ではないと思うのです。人類だけで人類が生きておるわけじゃないのですよ。生きとし生けるものの命をいただいて生きているわけです。水がなければ困る、食べ物がなければ困る。親鸞聖人は、十方衆生というのは、十方のよろずの衆生なり。すなわちわれらなり。これは、私は本当に大事な現代の多くの経済優先型の、あるいは力優先型の繁栄優先型の人間の中に欠落している感覚じゃないでしょうか。そういう量り知れない、生きとし生けるものの命をいただいて生きている私たちであると。そういうことに気が付くとね、世界が開かれるということがあるわけです。

もう一人ですね、これは私の妻が聞いてきたのですが、大木さんという方で今年百歳になられる、かつては従軍看護師さん。その時代のことを話されたのを聞きまして。食べられるものは何でも食べたというのですよ。私はびっくりしたのね。妻もびっくりしたと思うのですが。ゴキブリまで食べたというのです。ゴキブリを好きな人はいないですよ。ゴキブリを見るのも嫌だとかこういう人は非常に多いわけでございますが。それで、百歳まで生き延びて、戦争の悲惨な状態を語る。語るというのは語りたくて語るというよりは本当に戦争は悲惨であり、平和がどれ程大事であるかわからないと、そういう平和への訴えでしょう。そういう悲惨な現実の中から、本当の平和の願いということが湧き出してくると、それを抑えることが出来ないと。そういう力を持っておるのだと思います。

ウジ虫のことで私思い出すことがあるのですが、十代のときでありますけれども、京都の山科に

一燈園という西田天香さんが始められた、道を求める人たちの集まりがありまして。そこにほんのしばらくですけれどもお世話になった「畑の小舎」というのがありまして。お粗末な小舎ですが。そこに生き悩んだり、食べられなくなったり、色んな方々が来て、一燈園で生活をする。京都の町へ行って、ゴミの中から使えるものをいただいてくるとかね。まあそういう残飯で生活をいただいでいくというその畑の小舎の時に聞いたのですが、京都の方から日ノ岡の坂を登って降りて。日ノ岡の坂っていうとかつて親鸞様が通られた道であると思っております。

印象に残っておりますのは、残飯をいただいてきて、夕食で食べていたと。ある人の中川さんという方なのですが、口の周りにウジ虫がついていた。ウジ虫がいたのを知っていて食べたわけじゃないのですよ。食べられるから食べた。ウジ虫はちゃんと知っているのですね、食べられると。「ウジ虫が這っていますよ」というと、「ああそうですか」と言ってむしゃむしゃ食べていたという話を聞いたのですが。それは道を求める人の一つの姿なのだと思います。

人間はご縁があればウジ虫も食べる存在であると。誰かがという私がそうであります。私は絶対食べませんと言うならば、死ぬほかないですね。恐らくウジ虫を食べた人も、看護師さんのゴキブリを食べた人も、やっぱりその命をいただいて私の命がいまあるということではないでしょうか。そうすると、人間中心主義じゃなくて、十方衆生という生きとし生けるものの命が養われているということが言えるのではないのでしょうか。

私は何故このようなことを申し上げますかと申しますと、これは親鸞聖人の視野の中には既にそういう問題が入っていると。仏陀釈尊にも入っていると。仏陀釈尊が明らかにしてくださった阿弥陀の本願の視野の中にそういう問題が既にしてご覧になるどころか、痛み悲しまれておると。そこに大悲の願という大きな悲しみの願という意味があるわけですね。

曾我量深先生という方は、赤表紙と新聞を常に読まれていた方であります。赤表紙というのは聖教。勤行集は赤表紙になっているでしょ。昔は、聖教は和綴じでね、赤表紙だった。仏陀釈尊やら七高僧、そういう真実を明らかにされておるお聖教ですね。そして新聞というのは現実です。問題が絶えない、そういうしかるべき方であっても縁があればやってしまうという。曾我先生という方は、聖教を読まれると同時に、現実の問題に目を開いておられた。現実の問題と別個にあるのではないのですよ。「正信偈」をいただくということは。私たちが現実のどうしようもないような困り果てた問題を抱えるならばそれはむしろ「正信偈」に出遇っていく大事なご縁である、チャンスである。そういう意味があると思います。そして現実生活の意義を見出していくということが言えると思います。

もう一つ九月でもうすぐお彼岸ですね。今年の夏は本当に暑くて酷暑と言う。今まで生きてきた中で一番暑い夏でした。大自然は人間の都合通りにはいきません。人間の都合を超えておるわけでありまして。しかし粛々と四季の移り変わりは私たちの上に起こってくると。いま紹介したいことはですね、これは先日の日曜に俳句の時間に紹介された喜多方市の末永淳子さんという方の俳句なのですが、「徘徊の 父の手にあり まんじゅしゃげ」。どうもこの方は認知症になられたようで、徘徊しているという。徘徊してきてお父さんが見つかった、あるいは帰って来た時に、まんじゅしゃげを持ってきた。彼岸花のことですね。真っ赤な。それを持っているという。すごいなと思いますね。人間の生活というのは。そのお父さんの姿に感動したのでしょうか。その娘さんの感動を受けて、私たちもまた感動すると。感銘すると。個人的な些細なことだと思われるかもしれないけれども。言葉では言い表せられないような。生きておるといふ人間の尊厳性ということが私は表現されているという風に思うのです。

それから何十年も前のことなのですが、北陸の方で認知症の方々の集いがあったですね、北陸と言えは真宗門徒の方々が非常に多いわけですが。「正信偈」のお勤めができたというのです。認

知症になられた人の多い中ですよ。「あなたの名前は何ですか」と問われて「さあ」と言う人が。有名な作家の丹羽文雄さんがね、認知症になられて。奥様に「あなたどなたですか」とね、言われたことがテレビで放映されたのが印象に残っているのですけれども。そういう方が、「正信偈」のお勤めをされたというのです。すごいじゃないですか。私たちがいただいていく、学んでいく「正信偈」は、認知症になられてのことがあっても消えないようなね。そういう「正信偈」をいただいていくのであると。

それはね、人間のいわゆる価値判断とか分別というものを超えて、貫いて、命それ自身に息づいている、脈打っている。そういう歌ですね。歌は感動の歌なのです。感動の歌は嬉しい時だけじゃないです。悲しみもですよ。生きようか死のうかというところに躊躇ったり迷ったりね。そういう時に出遇った一言。真実の一言というのは本当に大きな力を持っております。真実の一言という。それは人生そのものを転換させるような用きを持っておるわけです。そういう「正信偈」に私たちは出遇わせていただいて学ばせていただくと。

曾我量深先生の尊い教えの中では、「正信偈」の一句一句が南無阿弥陀仏の念仏であります。だからそういう言葉に触れますと、たしかに言葉は仏教の大事な真理を表す言葉であって、難しいと言えど難しい。しかし一句一句が南無阿弥陀仏でありますという時にですね、それをわかるとかわからないとかというそういう次元を超えてね、聞いていくことができる。問題を出していくことができる。問題を出していくということが出来るというよりは、問題を感じないで生きてきた人生に問題が与えられると。わからないということが与えられると。そういう問いが湧き上がってくると。問いが湧き出す。これが人間と言えるのだろうか。これで私の人生はいいのだろうか。

私は高齢者と言われるような年齢でありまして、客観的に言いますと余命短いということでもあります。これでいいのかと。そういう問いをね、与えられた。そこに一日一日が、自分自身が掘り起こされていくと。浅い狭い価値判断で自分が駄目だと言っていないかと。そんなものではないだろうと。廣大無辺なる命の歴史そういうものをこの身に既に受けて生きておるあなた自身の命ではありませんかと。やっぱりこうそういう一日一日が出遇っていく。そういう大事な意味があり、存在に光が当たるというそういう大事な意味があると思うのであります。だいたい八月が過ぎたということもあって話が前置きと言いましたが、私の気持ちでは「正信偈」をいただいていると、大事なことだなあと思いながらお話をさせていただいたのであります。そういう私たちに「正信偈」の言葉が響いてくるということがあるのであります。

今日は「正信偈」の言葉では、このテキストの六頁の「五劫思惟之摂受 重誓名声聞十方」というこの一行二句ですね。もう時間が一時間近くになっておりますのでそこだけ声に出してご一緒に現代語訳を拝読させていただきたいと思っております。

五劫という長い時をかけ、思索を深める中から根本の願いを選び取って、み名（名号）にあらわされ、重ねて誓われました。

どうかこのみ名とそのいわれがよく聞かれ、あまねく十方の世界にひびきわたりますように、と。

このように現代語訳をさせていただいたのでありますが、今までの展開から申しますと、法蔵菩薩が世自在王仏のみもとで、国王を棄てて比丘となって道を求める人となったと。それで世自在王仏に道を求め、世自在王仏に勧められてあらゆる仏様の世界の生まれる原因と、あらゆるこの人間の善し悪しということを見極めて、その中から無上殊勝の願を建立した。無上殊勝の願というところでは、すべての人の依りどころとなる清らかなる浄土を建てようと。建立無上殊勝の願とい

うのはすべての人。その中に私がいるわけです。

先程申しました親鸞聖人の御了解。十方衆生と言う時に、よろずの衆生であって、我らである。私がそこにいるということを忘れるとね、他人事になります。この我自身というのは、絶対に外すことのできない事実なのです。ここにいる中津功であります。私自身が老いて、縁があれば命終わっていくのであります。他の誰の人生でもありません。一人ひとりが自分自身にいただいた人生であると。これがはっきり地盤として貫かれています。そのことを忘れると折角尊い教えのご縁に出会いながら他人事になってしまう。

他人事にする場合はもう外道なのですよ。自分の道じゃないのです。外道っていうのはね、そういう遠い人の遠いやり方じゃないのですよ。私たちの日常生活の中にあるのですよ。深刻な問題を生きておる人がおられてもそれを他人事にして、ああ私でなくてよかったと胸をさすって終わるならば、それは外道ですね。ああ胸を撫でて終わったことにしている。浅ましいなど。恥ずかしいなどということが出てくるとね、繋がりが切れないわけでしょ。わかったことにする。済んだことにする。その名人です、人間は。私は。そうできない問題がある。

私は安倍総理の談話の中で、何を言っているかと、首相ともあられるお方がと思うことがあるのですが、それは今の若い人たちにですね、私たちの時代、先人たちが作った戦争の罪悪に対して、「謝罪する必要はありません」というのですよ。関係がないから。そういう言葉だったと思いますが。よくもまあしゃあしゃあと言われるなどと思ってね。そういう歴史を生きてきているのですよ。殺し殺されるというね。関係ないなんてよくもまあ言えたものだ。ごめんなさい、ちょっと感情的になっているかもわかりませんがね。私はそんなもんじゃないと思うのですよ。人間の歴史ということをおね、命の深い歩みですよ、人類が始まる以前からの歩み。命の深い繋がりですよ。日本人だけの社会じゃありません。地球規模、宇宙規模でしょ。そういったことに本当に目が開かれるということに大事な意味があるわけですね。そこに人間に生まれたということが私の考えている以上に深く尊い大事な意味があるわけでありませう。

この本願を、無上殊勝の願を建立され、希有の大弘誓を超発されたと。それを受けて、五劫という長い時をかけ、思索を深める中から根本の願いを選び取って、み名（名号）にあらわされ、重ねて誓われましたと。どうかこのみ名とそのいわれがよく聞かれ、あまねく十方の世界にひびきわたりますように、と。四十八願の建立を受けて、この「正信偈」ではそれを更に、五劫という。劫という時代はですね、これは何故五劫思惟なのかという問いをおね、お一人おひとりが自分の胸に当てて考えられることが大事なのではないかと思います。

劫ということはよく言われますように四十里四方の立方体の石を、天人が羽衣で百年に一度来て、それがすり減る時間が劫であると。その石の大きさとか百年にいっぺんあるいは三年にいっぺん、色んな説がありますけれども、これは磐石劫という石の大きな立方体に天人が羽衣でさする。それがなくなる時間ということで譬えています。それから芥子粒を一粒、一粒拾って出してなくなる。それを芥子劫とも言われるのです。

劫というのは永遠に等しいような。思惟ということは法蔵菩薩が思惟するわけで、いかにしてうまく世渡りするかというそういう思惟じゃないのですよ。十方の衆生、皆、目覚めるにはどういう道があるかという思惟なのです。思惟（しい）という風に読むと人間の思索ということになるのでしょうか。五劫思惟という思惟は法蔵菩薩の思惟です。法蔵菩薩の思惟ですから人間の思索程度のものじゃないのですよ。

人間の科学的な研究はですね、原爆を作って良しとするでしょう。おかしいじゃないですか。殺人兵器を一挙にね、殺す。赤ちゃんもお母さんも。人間やっているのですよ。これは人間の思惟ですよ。如来の法蔵の思惟というのはそんなものではない。それが人間の求めていることか。あらゆ

る命あるものが求めていることか。だから思惟っていうことは非常に大事なことです。それを、五劫をかけて思惟する。なんで五劫の時も思惟されるのですか。私は思い切ってずばり私の感じていることを言わせていただくと、ここに私という人間がいるからです。この私という人間が気付いて、目覚めて、生きるということは並々ならぬことであるということをお教えられますね。それはそういうことをもう既に教えられております。

『歎異抄』の後序のところに。聖人のつねのおおせには弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけりという言葉があるのですね。五劫思惟の願をよくよく案ずれば、です。いい加減じゃないのですよ。よくよく案ずれば。ひとえに親鸞一人がためなりけり。ひとえに親鸞一人をたすけんがための願であったという。そこに五劫思惟ということの、非常に深い意味があるわけですよ。それはされは束縛の業をもちける身にてありけるをと。これがね、束縛の業。どうにもならんようなね。自分の身も心も意思もどうしてみてもどうもならないようなそういう束縛の業をもちける身にてありけるを。たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと。

平凡の日常生活で恵まれている時にはウジ虫なんか食べられたものじゃないと。ゴキブリなんか食べられたものじゃない。そう思っているでも私自身がそういうご縁に遇えばウジ虫もゴキブリも食べるかもしれない。事によったらこれも人間というのは難儀なものだと思うのですが、同朋の日本人の肉を食べてはならんと敵の肉なら食べてよろしいということが最前線の戦場では言われていたようなのですよ。人間の皮を着た鬼みたいなね。親鸞様のすごいところは、人間は縁があればどういうことをしてかすかわからない。そういう存在ですよと。私自身が。そこが凄いですよね。さるべき業縁もよおせばいかなるふるまいもすべし。『歎異抄』の中の言葉で親鸞聖人が言っている。如来の大悲はそういう身にかけてられた大悲であると。ここが大事ですね。束縛の業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

合理的には勿論言えませんが、先程申しました傷から湧いているウジ虫を食べた。それをその言葉の中にあるように、親は戦場でうざうざと死ねば喜ぶというものではないという。そういう人間の深い願いに触れてね、自決はしないというようなことがあって生き延びたと。そこにウジ虫のおかげで生き延びられたと。ゴキブリのおかげで生き延びられたということは人々の深い繋がりがあるわけですよ。その繋がりの中で戦争という悲惨な事実から本当に学ぶべきことがある。そういう大きな意味を持ってくると思いますね。親鸞聖人がですね、つねのおおせとして弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば束縛の業をもちける身にてありけるをたすけんと思立ってくださった本願のかたじけなさよということはお五劫思惟という言葉の法蔵菩薩の思惟のですね深さ、尊さ、大事さということがこの身一人の上にはいただかれておると。それは十方衆生にかけておられる思惟であり、起こされた悲願であるからこそ親鸞一人の上にはいただかれておると。そういう意味ですね。だから一人が目覚めるということは十方衆生が目覚めていく道と非常に深い繋がりがあるということです。

長崎の市長さんが、一人ひとりが目覚めていく力こそが本当に世界を変えていくというそういう言葉がありました。非常に大胆な言葉ですが、私は真理に立ったそれは原爆の悲惨の中から湧きだしてきたことであろうという風に思います。一人ひとりの存在の尊さ。そして責任、使命と申しますか。そういうことまで教えられる。

今日は五劫思惟之摂受のところまでにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。